

# *The Temple of Fame* における 過去, 現在, 未来

石川 郁 二

## I

我々人間には欲がある。欲を無くそうと一生努力をすとしても、肉体という殻の中に生きている限り、完全に欲が無くなるものではないだろう。一つの欲を一時的に振り切ったとしても、地底のマグマから絶えず沸き上がってくる泡のように、新しい欲がまた生まれてくるものなのである。所詮、人間とはそのようなものであり、また、欲があるから人間と言えるのであろう。

*The Temple of Fame* は、その名が示すように、「名声」を扱っているものである。作品の後半では、「世の噂」についても「名声」に連なるものとして言及している。

この作品は、Chaucer の作品をヒントにしていることは周知の通りである。Pope の “Advertisement”<sup>1)</sup> によれば、Chaucer の *The House of Fame* である。Tillotson は、脚注及び “Appendix” で Chaucer の作品を引用し取り上げている<sup>2)</sup>。Chaucer や他の作家達の作品との比較については、この小論では取り扱わない<sup>3)</sup>。

この小論では、*The Temple of Fame* の「時」について考察してみたい<sup>4)</sup>。時間がこの作品では重要な意味を持っているようである。この作品を単に他の作品の模倣として片付けることは、真にこの作品を理解することにはならない

であろう。名声の評価の時期を基準にして、この作品の中で表されている過去、現在、そして未来について考察し、さらに真の名声に備わる永遠性をも、この小論で明らかにしようと意図するものである。

## II

まず、この作品の概要を述べることにする。

*The Temple of Fame* は夢に幻を見るという話の設定である。時は春、夜明けのまどろみの中で、不可思議な幻覚を見るのである。空の上、高い所から、宇宙空間とでもいえる場所から、地球を見ている。そして、まるで映画のカメラが被写体に近付いて行くように、地球上の物体へと接近し、描写が続いていく。広い景色を見回している時、ある音が聞こえてくる。その音の方へ目を移し、注視すると、荘厳な大建築物が見える。それは氷の岩の上に高く聳えている「名声の殿堂」である。

この建物は、屋根は丸くなっているが側面は四角になっている。その4つの壁は東西南北に向いている。そして、それぞれ真鍮製の門がある。

75行目からは、それぞれの壁面に彫刻されているものについての説明がある。各々の壁面の趣は皆違う。西側に面した壁には、主にギリシア神話の登場人物が現れている。テーセウス、ペルセウス、ヘラクレス、オルフェウス、アムピーオン達である。東壁には、古代帝国の創立者であるニノスやキルスが<sup>6)</sup>、そして、宗教、占い等に関係のある「東方の三博士」、ゾロアスター、カルデア人達が彫刻されている。儒教の始祖である孔子もここには見られる。南壁は、天文学に貢献したエジプトの祭司達や、エジプト王セソストリスが見られ、象形文字が美しく刻まれている。最後の北側に面した壁面は、ゴシック式構造になっており、ピタゴラスの弟子のザモルジス<sup>6)</sup>、ゴート族の立法者であり英雄のオーディン<sup>7)</sup>がおり、ドルイドや、弦をはずされたハープを持つ吟唱詩人、そしてかつて詩人達によって歌われた若者達、古い寓話によって名声を得ている者達が、外側の壁を飾っている。

殿堂の大きな門が音を立てて開き、語り手は中に入っていく。殿堂の内部の描写が始まり、そこで見たもの、聞いたものが語られる。137行から243行までは内部に燦然と輝く名声を持つ者達について、244行から275行までは、名声の女神について、その後、417行までは女神に嘆願に来る者達について描写されている。

それぞれの大きな門の通路には、賢人ぶった歴史家達が並んでおり、彼等の上には時の神が刻まれている。武装した英雄達やアレクサンドロス大王がいる。シーザーがおり、アウレリアヌスやスキピオもいる。そしてエパミノンドスが立っている。神のようなソクラテスやカトー達がいる。

Pope が第一級の人物として名前を上げているのは、詩歌の父であるホーマーである。次にはマントバの詩人バージルを上げている。そして、それぞれの後に、ホーマーとバージルの作品からの描写が続く。ホラティウス、アリストテレス、キケロ等のことが歌われ、その後、燃えるように輝く玉座に御座す女神が現れる。女神の姿は、昔の吟唱詩人が物語ったようなものである。

その後、女神の御前に、名声を嘆願する人々が現れる。あらゆる階級の人々が女神の前に身を屈める。学者、善良で品行方正な人々、武力で王になった者達、名声を望まない種族、派手好きの若い宮廷人達、王位を奸計で奪い取った者達等である。女神はそれぞれの言い分を聞き、ある者達には彼等の願いを叶えてやり、ある者達には恥辱を与え退ける。

その後、場面は「名声の殿堂」から「噂の館」へ移る。殿堂で見聞きしている語り手は、418行より、未知の力によって引っ張られ、殿堂の内部から抜け出す。眼前に美しい建物が現れる。それが「噂の館」である。その建物には無数のドアがあり、世界中のあらゆる知らせが瞬時に届けられるのである。そこは静寂とは程遠い、常に人声と騒音が入り雑っている場所である。集まる噂が真実なのか、虚偽なのか、その判断は人間にはつかない。

平和や戦争、健康や病気、生や死等についての知らせがあり、泡沫会社の創立者<sup>8)</sup>、偽医者、僧侶等、多くの群集がそこには見い出され、様々な噂をしている。それらの噂は、あるものはすぐに消滅し、あるものは残っていくのであ

る。

496行までの語り手は、始終、傍観者の立場にある。しかし、497行から最後まででは、語り手が傍観者として単に耳目を注いでいるだけではない。ある者が語り手に称賛を希望しているのかと尋ね、その答として、名声についての考えが述べられる。名声への期待を持ってやって来たが、本物の、真の名声以外には欲しくないと言い、作品は終わっている。

### III

名声の殿堂のそれぞれの大きな門には、内部に通じる廊下がある。そこには歴史家達が、まず飾られている。名声の最大の位を持つホーマーは、殿堂内部の奥に位置しているのであるから、大きな門のそばに位置している歴史家達の名声の殿堂における位は想像出来る。その歴史家達の上に、「時」の姿が見出せる。

Full in the Passage of each spacious Gate

The sage Historians in white Garments wait ;

Grav'd o'er their Seats the Form of *Time* was found,

His Scythe revers'd, and both his Pinions bound.

(145-8)

時の神の大鎌は逆に向けられ、翼は両方とも縛られている。歴史家達は、時の流れを「歴史」として把握することが出来ると考えてのことだろうが、殿堂においては門番<sup>9)</sup>ともいえる位置におかれていることを考えれば、どうもそれだけではないようだ。紋章の場合は逆になっていると不名誉を意味すると Tillotson の脚注にはある<sup>10)</sup>。さらに同脚注に、「時の神の大鎌は プルタークの口絵で逆向きに示されている」とあるが、もし Pope がその口絵を見たとしても、単に模倣するというだけで自分の作品の中に採用するとは思えない。これは、

Pope の “Advertisement” や “Note” を読んでも、単なる模倣作品とは考えられないからである。自分の作品にそれを採用するなら、それを作品に描くだけの理由が Pope にあり、意図があったと考える方が自然である。

時の神の大鎌が逆に向けられ刻まれているということは、何を意味するのであろうか。それは、この小論で扱っている時間の流れと密接に関係している。時の神は、歴史家達のこのような不遜な態度に忿懣やるかたないほどの不快の念を催していることだろう。時の神は、得意の大鎌が振えないのである。

この「時の神」の翼が両方とも縛られているということは、単に歴史家達のことのみを言っているのではないように思える。この殿堂内部が、時の神の支配を受けないということなのではないだろうか。つまり、歴史家達が門の所で時の神を押え込んでしまっているのである。時の神の支配が殿堂内部にまでは及ばないのである。さらに、この作品の設定が、夢にみている幻のことを語るということであり、そのことをも考えれば、此の世を支配している時間という観念だけで作品を読むのはまずいだろう。

このことは、名声の女神のことを考えても分かる。殿堂の女王である女神は、宝石をちりばめ燃えるように輝いている玉座に座っている。語り手が女神をじっと見つめれば見つめるほど、女神の身長は天井までもどんどん伸び大きくなっていく。そして、女神が大きくなればなるほど、殿堂自体もその大きさを増すのである。円柱は上へ上へと延び、それに従い天井も広がり、側廊も延びていく。

When on the *Goddess* first I cast my Sight,  
Scarce seem'd her Stature of a Cubit's height,  
But swell'd to larger Size, the more I gaz'd,  
Till to the Roof her tow'ring Front she rais'd.  
With her, the Temple ev'ry Moment grew,  
And ampler *Vista's* open'd to my View,  
Upward the Columns shoot, the Roofs ascend,

And Arches widen, and long Iles extend.  
Such was her Form, as antient Bards have told,  
Wings raise her Arms, and Wings her Feet infold....

(258-67)

幻の話なので、伸縮が自由自在と取ればそれまでだが、これは、見ている者の心の状態によって大きくなるとも受け取れる<sup>11)</sup>。畏敬の念を持ち、女神を崇めれば崇めるほど、そして名声を望む者にとってはそれだけますます、女神は近寄り難く、大きく感じられるのである。作品を読む限り、女神の姿には一定の大きさは無い。女神の大きさは空間的に変化するのである。

女神の永遠性に関しては、女神を賛美する下部達の歌に表されている。

Beneath, in Order rang'd, the tuneful Nine  
(Her Virgin Handmaids) still attend the Shrine:  
With Eyes on Fame for ever fix'd, they sing;  
For Fame they raise the Voice, and tune the String.  
With Time's first Birth began the Heav'nly Lays,  
And last Eternal thro' the Length of Days.

(270-5)

女神を称える歌は、時の誕生とともに始まり、永遠に続くのである。

女神は永遠性を持っている。神である彼女は、此の世の時の支配下にはいない。名声の殿堂の女神には、時の神とて近付けない。時の神は門から入ることが出来ないのだ。時間的にも空間的にも、我々人間とは違うのである。その名声の女神の住まいである殿堂も、我々の住居と違うのは当然である。そして、その殿堂に祭られるためには、やはり永遠性が必要なのである。

屋内に飾られている者達の中で、第一級の位を与えられているのはホーマーである。

But in the Centre of the hallow'd Quire  
Six pompous Columns o'er the rest aspire ;  
Around the Shrine it self of *Fame* they stand,  
Hold the chief Honours, and the Fane command.  
High on the first, the mighty *Homer* shone ;  
Eternal Adamant compos'd his Throne ;  
Father of Verse ! in holy Fillets drest,  
His Silver Beard wav'd gently o'er his Breast ;  
Tho' blind, a Boldness in his Looks appears,  
In Years he seem'd, but not impair'd by Years.

(178-87)

ホーマーの座は永遠に朽ちることがない金剛石によって作られている。彼は何年たっても、そこに光輝いている人物である。

ホーマーの次に位置するのは、マントバの詩人バージルである。彼はホーマーの上に、尊崇の眼差しをじっと注いでいる。謙虚な態度で、慎み深い威厳を持って、ホーマーを見上げているのである。

*An Essay on Criticism* の中においても、Pope はホーマーを最高の者として尊んでいる。

Be *Homer's* Works your *Study*, and *Delight*,  
Read them by Day, and meditate by Night,  
Thence form your Judgment, thence your Maxims bring,  
And trace the Muses *upward* to their *Spring*....

(*Ess. on Crit.*, 124-7)

When first young *Maro* in his boundless Mind  
A Work t'outlast Immortal *Rome* design'd,

Perhaps he seem'd *above* the Critick's Law,  
 And but from *Nature's Fountains* scorn'd to draw :  
 But when t'examine ev'ry Part he came,  
*Nature* and *Homer* were, he found, the *same*....

(*Ess. on Crit.*, 130-5)

擬古典主義の代表者といわれる所以がここにある。ホーマーは自然と同一視されており、永遠性があるのである。

殿堂の外部に刻まれている名前は、必ずしもすべてのものが残るというわけではない。名声の女神がたとえ一時的に許したとしても、それは最終的に「時」によって支配され、自然と取捨選択がなされ、名声の名に真に値しないものは淘汰されるのである。

名声の殿堂は荘厳な建物である。それはまるで絵を見ているかのように描写されている<sup>12)</sup>。西、東、南、北へと向いている外壁は、それぞれ古の名声ある者達によって飾られている。この者達は内部の永遠性とは関係がない。過去に名声があり、詩人達によって詩に歌われた者達でも<sup>13)</sup>、真の名声を勝ち得、残るかどうかは、年月が過ぎ去るにつれて、自ずと明らかにされるのである。

Inscriptions here of various Names I view'd,  
 The greater Part by hostile Time subdu'd ;  
 Yet wide was spread their Fame in Ages past,  
 And Poets once had promis'd they should last.

(31-4)

「時」とともに、自然の寒暖によって名前が薄れ消えていく。それは嵐や暑すぎる気候、つまり、妬みや嫉妬、そして称賛過多に堪えることが出来るものでなければ、朽ち果てていくのである。しかし、第一級のものは残る。真の価値があるものには永遠性が備わっているのである。名声にも色々な段階があるこ



とが分かるのである<sup>14)</sup>。

殿堂の内外に飾られている者達は、過去に属する人々である。ホーマー、バージル、ギリシア神話の登場人物、歴史上の偉人達等が、殿堂に彫刻され、または座している<sup>15)</sup>。これらの人々の多くは、その者の名前を出して語り手が説明出来る人々であり、すでに此の世には存在しない人々である。もう歴史のなかで、評価が決定されてしまっている人々である。勿論、この過去の人々の名声で、今日まで残っているものは、大きな名声であると言えよう。

名声の殿堂内部に入っている人々には、永遠性がある。そして、時間の流れから考えれば、名声に値するかどうかの判定はもうすでに行われてしまっており、定着している。過去に属する人々である。

#### IV

殿堂の中で、語り手は様々な群集が四方八方から大広間へ入って来るのを見る。276行から417行までは、名声の女神に嘆願に集まって来る人々のことが描写されている。無数の群集が、あらゆる階級の人々が聖堂を目指して集まり、女神の前に身を屈めるのである。彼等の嘆願は様々であるが、その願い事は皆同じである。その嘆願者達に、女神は、それぞれに相応しい賞罰を与える。

Their Pleas were diff'rent, their Request the same;  
For Good and Bad alike are fond of Fame.  
Some she disgrac'd, and some with Honours crown'd;  
Unlike Successes equal Merits found.

(292-5)

最初に現れるのは、学問界の人々である。自分たちの労苦を世間の人々は正しく評価してくれない。感謝も報酬も与えられていない。だから、正当な評価を、と彼等は女神に訴えるのである。彼等の一番欲するものは名声である。女

神はその訴えを聞き入れ、「黄金のトランペット」を吹きならすようにミューズの神々に命じる。

The Goddess heard, and bade the Muses raise  
The Golden Trumpet of eternal Praise....

(306-7)

この黄金のトランペットは永遠の称賛を知らしめるものである。ここでの「永遠の (eternal)」という形容詞は、「称賛 (Praise)」を形容しており、学者達は称賛においては永遠性を手に入れるのである。

次に現れる者は、善良で行い正しい人々である。彼等には“the loud Clarion”が吹かれる。願いは叶えられるのだが、先ほどの学者達の時に吹かれる“the Golden Trumpet”とは違う。位が下がるのだらう。

次に同じ要求を持ち出す群集がいる。彼等には中傷が飛び交い、醜聞があちこちから聞かれる。女神は“the black Trumpet”を吹かせる。

From the black Trumpet's rusty Concave broke  
Sulphureous Flames, and Clouds of rolling Smoke:  
The pois'nous Vapor blots the purple Skies,  
And withers all before it as it flies.

(338-41)

黒いトランペットからは、硫黄の炎が出、煙がもくもくと発生する。有毒な蒸気が天を汚し、すべてのものは萎み衰えてしまうのである。結局、彼等の願いは聞き届けられない。

次に王冠を被り甲冑を身に着けた一群がやって来る。彼等は戦いを起こし、家々を焼き、多くの人々を苦しめた後に王位を手に入れた者達である。「大望を抱いた愚か者め！」と名声の女王は言い、眉をひそめる。彼等の願いも聞き

届けられないのである。

この嘆願者達の中で、一風変わった願い事をする人々がいる。彼等は質素な服装をし物腰は遠慮がちである。称賛も名声も熱望してはいない人々である。他の人に知られることなく、人の噂にもならず一生を終えたいと願う人々である。有徳の行為が世間に広まり、噂になることがないようにと嘆願するのである。この願いに対し、女王は、そのような隠された美德を言い触らすことが自分達の誇りであるとし、ミューズの神々にそれを知らしめるように命じる。その調べは「世の中へは甘く、天空には快く」伝わっていくのである。

宮廷人達の描写は、*The Rape of the Lock* 中の描写を思い起こさせるものである<sup>16)</sup>。服装に凝り、道楽者で、宴会、舞踏会、演劇を好み、宮廷には足しげく通い、美人に話し掛けることに夢中になっている者達である。貴婦人達の社会的、性的秘め事<sup>17)</sup>を暴露し、淫らな話に時を楽しむ者達である。この宮廷人達の願い事に対して、女王は名声については触れていない。ただ、トランペット (the Trumpet) が天空をつんざき、貴婦人達の名誉が消えていくのみである。宮廷人達には名声は与えられないのである。しかし、彼等が噂している貴婦人達が恥をかくのであるから、噂の中で彼等の名前は残るであろう。それは真の名声とは程遠いものである。

次に、同じ要求をする多くの連中が、聖堂の周りに押しかけるが、「黒いクラリオン」(the black Clarion) が鳴り響き、嘲笑と痛烈な嘲りという結果になる。

最後にやって来るのは、自分達がなした他人に対する危害を自慢する者達である。名誉を得る為に、他の人々をひどい災いの中に放り込んだ者達である。願い事は当然叶えられない。

これらの嘆願者達はすべて一つの集団、群れとなって女王の前にやって来るのである。それぞれの階級、集団についての説明はあるが、個々の名前は上げられていない。

嘆願者達の行為は、過去において彼等が行ったことである。そして、それに対する評価を女王に求めにやって来るのである。「名声の評価の時期」という

ことから考えると、これは現在に属するであろう。まだ名声を得ているわけではなく、今それに対する判定を女王に仰いでいるからである。

女神によって認められる人々は殿堂に名前が残るであろう。しかし、そうでない者は殿堂から立ち退き、此の世の時の支配下に帰って行くのである。当然、永遠性もないのである。

## V

語り手は何か分からない力によって、彼のいる場所から引っ張り出され、場面は変わる。美しい建築物が眼前に現れる。地上に建てられているのか、空中に在るのかは分からない。素早い動きで回転し、絶え間ない騒音が壁に反響している。昼夜開けられたままの大きなドアが、木の葉あるいは海辺の砂と同じだけある。そして、あらゆる方面からの知らせが舞い込んで来るのである。これが「噂の館」である。

418行から496行までの詩句は、噂のことについて言及されているが、先の殿堂におけるような、個々のものの具体的な説明はない。単に、色々な噂の種が述べられているにすぎない。

There various News I heard, of Love and Strife,  
 Of Peace and War, Health, Sickness, Death, and Life;  
 Of Loss and Gain, of Famine and of Store,  
 Of Storms at Sea, and Travels on the Shore,  
 Of Prodigies, and Portents seen in Air,  
 Of Fires and Plagues, and Stars with blazing Hair,  
 Of Turns of Fortune, Changes in the State,  
 The Falls of Fav'rites, Projects of the Great,  
 Of old Mismanagements, Taxations new——

All neither wholly false, nor wholly true.

(448-57)

これらは、読んで分かる通り、箇条書き的に知らせ (News) の種類を列挙しているだけである。そして、その真偽のほどは確かではないのである。

これらの知らせが「噂の館」に集まってくる様子は、必然的に炎が上へと上るように、川が海へ流れ出すように、磁針が北を示すように、すべての知らせがこの館に寄り集まって来るのである。

噂は波紋の様だと描写されている。一つの石が静かな湖の中に投げ込まれると、それによって作り出される輪はどんどん大きく広がって、湖面に次々と波紋が伝わっていく。その様に、噂も大きくなり、広がっていくのである。そして、噂が口の端にのぼり、人から人へと伝わっていく間に、必ず何か新しいものが付け加わり、尾ひれが付いて語られるものである。そして、人によって十分に語られ、それが熟してしまうと、人間の力では、どこまでが真実でどこまでが嘘かを見分けることが出来なくなってしまうのである。

語り手はそこで多数の群集を見る。そこを行き来している人々は多い。しかし、彼等の具体的な名前は述べられていないし、説明もない。ただ、それぞれの群集を総括的に表す名称だけである。偽医者、僧侶、パーティー熱狂者等色々な者達がおおり、声高に、または密かに噂を語っているのである。

この「噂の館」に集まる知らせの行く末を決定するのは「名声」である<sup>18)</sup>。それらが口にのぼっている期間や、それらの勢力を定めるのである。それらが残るかどうかは、それぞれの価値、値打ちによるのである。ほとんどの噂はすぐに消え去るであろうが、本当に価値のあるものは、噂の段階に留まっていることなく、名声への一步を歩み出すものである。

噂は、実際にはもう行われたもの、または単に臆測の場合もあるだろうが、一応、その噂に類することがあったものと考えてよいであろう。火の気のまったく無い所に煙は立たないのである。

名声として残るかどうかの判断の時期には、まだ至っていないのが噂の段階

である。名声というものを基準にして考えるならば、噂が名声になるのはまだこれから先のことなのである。名声の殿堂に嘆願に来るもっとずっと前の段階のものである。噂が定着し、それが真実であることが分かり、後世に残る価値があると思われるようになって、初めて真の名声が出てくるものである。だから、噂されているという時期は、名声から考えれば、名声の予備段階であり、その噂が名声になるのは未来のことである。つまり、「噂」、「名声の嘆願そしてその評価」、「名声の殿堂に残る」という時間の流れがあるのだから、ある噂が名声の殿堂において評価の対象となるのは未来のことなのである。未来の事であるからこそ、噂の段階では真偽もまだ不確かなのである。

## VI

497 行から最後まで、語り手が単なる傍観者の立場から、問答を交わすという立場に変わっている。

「汝は称賛希望者なのか」と問われ、語り手はいままで見聞きしてきたことを踏まえて、世人の噂の中で死後生きるとは空しいと感じる。そして、名声を手に入れるためには大きな犠牲を払わなければならないと分かる。しかも、その名声がいつまで続くか分からないのである。

しかし、彼は名声を望んでいる<sup>19)</sup>。しかも、真の名声をである。

But if the Purchase costs so dear a Price,  
 As soothing Folly, or exalting Vice :  
 Oh ! if the Muse must flatter lawless Sway,  
 And follow still where Fortune leads the way ;  
 Or if no Basis bear my rising Name,  
 But the fall'n Ruins of Another's Fame :  
 Then teach me, Heaven ! to scorn the guilty Bays ;  
 Drive from my Breast that wretched Lust of Praise ;

Unblemish'd let me live, or die unknown,  
Oh grant an honest Fame, or grant me none!

(515-24)

永遠に続く名声, 真に尊敬される名声ならば, という語り手は, 名声の殿堂内部にいる第一級の位を持つホーマー, そしてパージルに与えられているような名声を望んでいるようである。名声といっても様々なものがある。第一級の名声, それは此の世という時の神が支配する場所における名声ではない。永遠性を持つ名声は天上における名声と言ってもよいものである<sup>20)</sup>。

## VII

18世紀前半の文学は擬古典主義の時代と考えられている。Popeはこの時代の代表的な詩人である。擬古典主義とは, すでに述べたように古典を貴び, そこに範を求めるものである。これはPopeの作品を読んでも分かる。しかし, 単なる模倣ではない。後世に残るものがこの時代に生まれているということから見れば, そこには何かその時代特有のものがあリ, 独創性がなければならぬ。

この作品の中でもPopeはホーマーに最高の位を与えている。しかし, それはPopeの文学観を示すものに他ならない。Chaucerや他の作家達の作品からの模倣があるからといって, この作品が単なる模倣作品として, 比較対照のみで片付けられてはならないのである。

*The Temple of Fame* においては, 時間的なものを考えるべきである。作品の中で取り上げられている「殿堂に飾られている名声」, 「そこに嘆願に来る人々」, そして「噂の段階」という作品における順番は, 名声の評価の時期ということを基準にして考えるならば, 「殿堂における名声」は過去に属するものであり, 「女神への嘆願者達」の時期は現在, そして「館に集まる噂」の時期は未来という具合に分けられるものである。つまり, その時間的な違いは,

「もう既に評価が確定されたもの」, 「今現在それを決定しているもの」, そして, 「まだ噂の段階で真偽のほどははっきりしていないもの」に分けられているのである。

「名声の殿堂に飾られているものを見物」し, 「殿堂に来る嘆願者達を見聞き」し, それから「噂の館」へと描写が移っていく傍観者である語り手のこの順番は, 「噂が広まり」, 「それが価値あるもので世人の評価が高まり」, その結果「名声となり定着」していく, という本来の過程とは逆のコースであることが分かる。時の神の大鎌は, まさに逆に向いているのである。

後世に残る大きな名声, 真に価値ある名声には永遠性がなければならない。時の神の翼が羽ばたくことが出来ない場所に位置しなければならないのである。Pope は, その様な永遠に称賛される名声を求めて, 作品を書いているのである。

#### 《注》

- 1) Alexander Pope, *The Temple of Fame in The Poems of Alexander Pope*, ed. John Butt (London: Methuen & Co. Ltd., 1968), p. 172. Pope 自身が作品の冒頭に付けているものである。“The Hint of the following Piece was taken from Chaucer’s *House of Fame*. The Design is in a manner entirely alter’d, the Descriptions and most of the particular Thoughts my own...”  
尚, この小論における作品の引用はすべてこの版による。
- 2) Geoffrey Tillotson, ed., *The Temple of Fame in The Poems of Alexander Pope* (London: Methuen & Co. Ltd., 1972), II.
- 3) *Ibid.*, この本の脚注, “Appendix,” “Introduction” の中で, Tillotson は Chaucer の作品ばかりではなく, 他の作家達の作品との比較も行っている。また, Donald B. Clark, *Alexander Pope* (New York: Twayne Publishers, Inc., 1967), p. 21 には, *The Temple of Fame* と *The House of Fame* を簡略に比較している記述がある。
- 4) Alexander Pope, *op. cit.*, p. 172. Pope が作品の前に付けている “Note” に次のような記述がある。“The Incidents indeed, by which the Allegory is convey’d, must be vary’d, according to the different Genius or Manners of different Times...”
- 5) 上記 John Butt 版の176ページ。ニノス (95行), キルス (96行) 脚注参照。



- 6) Herbert Davis, ed. *The Temple of Fame in Pope: Poetical Works* (Oxford: Oxford University Press, 1983), p. 136. ザモルジス (123行) 脚注参照。
- 7) 上記 John Butt 版の177ページ。オーディン (124行) 脚注参照。尚, “Odin” に関しては, Tillotson, *op. cit.*, “Introduction” (p. 235) に説明がある。
- 8) 上記 John Butt 版の186ページ。“Projectors” (463行) 脚注参照。
- 9) Tillotson, *op. cit.*, 146行の脚注に *The Tatler* から引用して “janitors” とある。
- 10) *Ibid.*, 147行の脚注参照。
- 11) Maynard Mack, *Alexander Pope: A Life* (New Haven: Yale University Press, 1985), p. 165. 名声の殿堂は氷の岩の上に建てられており, Mack も言っているように, 名声の女神やその殿堂が超現実的に大きく広がるということは, 名声がいかに不安定で儂いものであるかということをも表している。
- 12) Peter Quennell, *Alexander Pope* (New York: Stein and Day, 1970), p. 107.
- 13) 詩人の歌った主人公が, その詩歌と共に永久に名を留めるようにと歌うやり方は, よく見られる。
- 14) Tillotson, *op. cit.*, “Introduction” (p. 226). Pope は人物を, その人物の偉大さで尊敬すべき序列を付けている。
- 15) *Ibid.*, “Introduction” (pp. 234-5). Pope は満足な学校教育を受けておらず, 家庭教師から学んだり独学であったので, 作品にのっている人物の説明に勘違いもあったようである。
- 16) *The Rape of the Lock*, Canto II, III.
- 17) Tillotson, *op. cit.*, 388行の脚注参照。
- 18) *Ibid.*, “Introduction” (pp. 227-9). “Fame” の定義の変化について述べている。Pope の時代ではまだ “rumour” と意味の上で関係があった。
- 19) 傍観者として女神を見ている描写においてもこのことは分かる。女神は大きさを増しているのである。
- 20) Clark, *op. cit.*, p. 21, “an enduring heavenly fame” とある。